

埋蔵文化財調査センター
ニュースレター

特集 曲物

曲物とは、スギ・ヒノキの薄板を筒状に曲げて製作した道具です。筒状にした一枚板の両端を上下に重ね、ヒゴ状の樹皮で綴じ合わせ、固定し、側板とします(下記イラスト参照)。側板に底板が取り付けられた曲物としてお櫃、盆、桶があり、底板に湯気を通す孔が穿たれた曲物として蒸籠(セイロ)があります。縄文文化における曲物の有無には諸説ある一方、一般的に本州では11世紀(弥生文化)～6世紀(古墳文化)の遺跡で曲物が発見され始め、8世紀以降に曲物の発見される遺跡が増加します。

北海道の遺跡における曲物の利用は、8世紀(蝦夷期)以降に始まります。北海道の遺跡で発見された曲物のほとんどは、北海道に自生しないスギ、ヒノキを素材として製作されていることから、本州から製品として持ち込まれた搬入品と考えられています。

本特集では、北大構内で発見された曲物を紹介します。



▲ 曲物容器の底板の発見状態

K39遺跡国際科学イノベーション拠点施設地点では、埋没河道に堆積した粗砂層中に、容器の底板1点(直径約11cm)が発見された。小型の曲物桶の底板と考えられる。その曲物の時期は、同一地層で確認された土器の特徴から、縄文後期(約12世紀)と推定する。

■ 木製容器としての曲物

遺跡から発見される木製容器には、刺物、曲物、結物があります。刺物では、手斧や槌器で丸太を削り出したボウル状容器が縄文文化で発達しました。

曲物は、様々な容量の器を側板の直径によって製作できたため、奈良文化以降、刺物を凌駕するほど庶民に重宝されたといわれています。厚さ5mmほどの側板素材を円筒状に曲げる際には、湯をかけて板を柔らかくしたり、小刀で板の内面に切り込み(2頁:エルクトンネル地点の曲物側板参照)を施していたと分かっています。

14世紀以降、短冊状の板を円環状に並べて筒状とし、その外側を竹の縄で縛り付けた結物の桶、樽が出現します。縄で締め付ける方で隣接した板を密着させた容器です。大型の曲物桶と結物桶より一時、同時期に利用されていました。しかし、大型の桶より、約16世紀以降、強度が低い曲物桶の代わりに、結物で作られるようになります。

大型の曲物の桶は作られなくなった一方、曲物の茶葉入れ・蒸籠・弁当入れは、小型で簡便なものとして、16世紀以降も、用いられ続けました。

一邇上人絵伝(約14世紀)

飲食を施す場が描かれている。地面には大型の曲物桶、茶色の衣服をまとった左向き男性の前に結物がみられる。

『一邇上人絵伝(遊行上人伝絵巻)』(東京国立博物館所蔵、「CoBase」収録)

(<https://jssearch.go.jp/item/cobas-48094>)



■ 北海道の遺跡で発見された曲物の分布

北海道では、8世紀(縄文期)～18世紀(アイヌ文化期)の遺跡で曲物が発見されています。各遺跡の曲物は、完形で見つかることは稀で、バラバラの状態で見られることがほとんどです。縄文期では道央部、道東部の遺跡で曲物片総数24点が発見され、アイヌ文化期では道南部、道央部、道東部の遺跡で曲物片総数135点が確認されています。



▲北海道で曲物が発見された主要遺跡

■ 曲物の製作

曲物の製作方法では、重要な工程が三つあります。曲物桶を取り上げると、①木材から板を切り出し、側板素材と底板を整形・用意する工程、②側板素材を筒状に曲げて樹皮ひごで縦じ、側板として形を固定する工程、③底板と側板とを接着し組み合わせる工程です。

側板素材を用意するためには、丸太を楔状の道具で割って、厚さ1cmほどの板材を作った後、板材の断面に細長い篋を挿入し、足指で支え、薄板を削りながら削っていたと考えられます。



▲曲物の薄板を準備している様子
(鎌倉職人歌合(写本、18世紀～19世紀) 国立国会図書館所蔵)

■ セロンベツ川の名前の由来

北大構内を流れていた河川の一つに、「セロンベツ川」があります。知事公館、植物園の湧水を源として、北大第一農場から恵庭寮に向かって蛇行していた河川です。

山田秀三氏は「松前氏の時、番人等鯉を「せいろう」に入れて塩鮭を製したる筈なれば、斯く名と云う（永田方正『北海道根拠地語地名解 明治24年刊行』）を引用し、セロンは蒸籠（セイロウ）が訛って発音され、その下に川を意味するベツが付けられたと「セロンベツ川」の由来を解釈しました。当時、蒸籠を使った様子がしばしば川辺で見られたのでしょうか。

河川の名前が定着した頃の蒸籠は、塩鮭作りのどの工程で使用されたかよく不明ですが、曲物の形態であったと考えられます。



▲山田秀三氏の著書写真
山田秀三「札幌のアイヌ地名を尋ねて」 楢書房
1965年刊行

■ 2020年度北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点の本発掘調査【速報】

2020年9月から11月までの期間、北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点の本発掘調査を実施しました。調査では、屋外炉址、焼土粒子集中箇所の遺構が確認されるとともに、土器片、石器、竈など約1000点の遺物が発見されました。

関係機関の協力によって行うことができた調査は、来年度継続して実施する予定です。



▲黒曜石製石竈の出土状況



▲調査風景



▲屋外炉址の確認状況

編集後記

北海道の遺跡で発見された曲物を集成すると、北大構内の遺跡が本州との交流の重要拠点であったと分かります。

本号をまとめるにあたり、北海道埋蔵文化財センターの田口尚氏に、多くのご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。（守屋）

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター第37号

発行 : 北海道大学埋蔵文化財調査センター
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話 : 011-706-2671 FAX : 011-706-2094

e-mail: hokudaimaibun@gmail.com

URL : <http://maibun.facility.hokudai.ac.jp/>